

翻訳思想のドイツ的伝統と変容—ゲオルゲ・クライスの翻訳論

三ツ木 道夫

(同志社大学言語文化教育研究センター)

This paper refers to a translation theory of a German poet group called "George Kreis". The "fidelity" principle of translation was dominant in Germany in the early 19th century; prominent poets and thinkers of the time, especially those who considered seriously the future of their language and culture, such as Goethe, Humboldt and Schleiermacher, all supported this principle, establishing a Germanic tradition of translation. After about 50 years of dominance, however, the principle of fidelity was denied by Wollamowitz-Moellendorff, the authority on classical philology. George-Kreis was a rival to Willamowitz in translation of the ancient Greek, and they revitalized the old traditional methodology. It is the purpose of this paper to consider the process and the motives of this revival.

1 はじめに

本稿は近代ドイツの翻訳論史を扱う、いわゆる問題史的考察の一つである。具体的には詩人シュテファン・ゲオルゲ(Stefan George 1868-1933)を中心に形成された文学者グループ「ゲオルゲ・クライス」(以下クライスと略記。クライス Kreis とは「環」、「サークル」を意味する)の翻訳観を取り扱う。その際、「起点言語」重視か「目標言語」重視かという、翻訳の二つの原理を暫定的な概念装置として用いておきたい。西欧の翻訳思想は、ある時期までこの対概念を中心に展開してきたのも事実なのである(注¹)。また現在のところ、筆者にはこの「忠実」と「自由」という対概念の他には、翻訳の思想史を記述できる概念が見つからないのである。

ゲーテ(Johann Wolfgang Goethe 1749-1832)が生きた時期は文学史的には「ゲーテ時代」と総称されるが、この時期の翻訳思想はもっぱら「忠実」原理が支持され、隣国フランスなどと比べ、この原理に基づく翻訳が一種の<ドイツ的伝統>となったかに見える(辻 1993:139 以下; ベルマン 2008)。これはゲーテばかりでなく、フンボルト(Wilhelm von Humboldt 1767-1835)あるいはシュライアマハー(Friedrich Schleiermacher 1768-1834)の翻訳論にも見て取れるのである。この伝統はニーチェ(Friedrich Nietzsche 1844-1900)の世代において、いったんは途絶えるが、およそ 100 年後のゲオル

MITSUGI Michio, "The German Tradition of Translation Theory and Its Transfiguration." *Interpreting and Translation Studies*, No.8, 2008. pages 151-168.

ゲの世代において復活してくるように思われる。

ゲーテ時代の無名の狂詩人ヘルダーリン (Friedrich Hölderlin 1770-1843) の翻訳作品を発掘し、その翻訳方法を称揚する形で、クライスは自らの翻訳観を語っている。ヘルダーリンはあまりに極端に「忠実」原理を追求したために、同時代の伝統形成者たちからも理解されなかったが、クライスはこのヘルダーリンに仮託して自らの翻訳観を語っていたのである。

だがこの仮託という手法ゆえに、クライスの翻訳観そのものは十分に検討されてこなかったと言える。たしかに彼らがゲーテ時代の「動的な」言語理解に遡り、そこから翻訳考察に関する糧を得ていた点までは考察されている (Apel 2003, p.94)。しかし、この伝統への遡求が、ゲーテやフンボルトではなく、ヘルダーリンの翻訳方法を解釈するという迂路を経たために、異様なほどドイツ的な刻印を帯びてしまった点までは明らかにされていない。本稿では、＜ドイツ的伝統＞の成立と衰退をまず概観し、次にクライスの翻訳観を再構成する。最後にその翻訳観の根底に存在した奇妙な歴史意識と国語意識を明らかにしたい。

2 翻訳思想のドイツ的伝統？

2.1 ルター

近世ドイツ翻訳史上の先駆者であるルター (Martin Luther 1483-1546) は、「忠実か自由か」という観点からすると、聖書翻訳において、いわゆるダブル・スタンダードの方法を採用している。つまり新約聖書翻訳のある局面ではドイツ語としてこなれた翻訳文を生み出すために、聖書には存在しない言葉「ただ……だけ *allein*」を付加してしまう。当時正統の聖書として流通していたラテン語聖書にもギリシア語原典にも存在しない言葉が、「それがドイツ語の特性なのだ」、あるいは「ラテン語やギリシア語ではなく、私はドイツ語を語りたかったから」という理由で付け加えられてしまう。これは「ローマ人への手紙」第三章の翻訳部分にみられる翻訳手法である。

だがルターは別の箇所では逆にドイツ語としての分かりやすさを犠牲にして原典の言語表現を再現しようと試みている。ドイツ語としてこなれた表現が他にあるのを知りながら、ルターはあえて原典の表現を再現することにこだわる。「ヨハネによる福音書」第六章にある「父なる神は人の子にそれを封印した」という、原文そのままでは明晰とは言いがたいイエスの言葉である。しかし、ルターは「この言葉から離れるよりはむしろ、ドイツ語を破壊する方を」選び (ルター 1530, p.344 以下)、意味がすんなりとは理解されない語法で訳出したのである。

つまりルターにとって翻訳者が選び取るべき方法は対象 (および信仰のありかた) に規定されるだけで、方法自体の可否は考察される必要がなかった。それゆえ方法上の首尾一貫性もまったく問題とならなかったのである。

2.2 ゲーテ時代

方法自体が考察されるようになるのは、19 世紀の前半、おそらく、歴史の中で自分たちがどこに位置しているのかを問う動きが現れてからのことである。それは同時にルター聖書のドイツ語が、ゲーテやシラーによる彫琢を経て、文語の文体が確立されていった時代でもあった。たとえばドイツ・ロマン派の神学者シュライアマハーは、1813 年のアカデミー講演において、翻訳の方法を極端に二分化す

るく古典的>ともいえる定義を行う。「私が見たところでは道はふたつしかありません。作家をできるだけそっとしておいて読者の方を作家に向けて動かす、あるいは読者の方をできるだけそっとしておいて作家を読者に向けて動かす、このどちらかしかありません。ふたつの道はまったく異なるのですから、どちらか一方を徹底して厳密に追求する他なく、折衷してみたところで精々信頼に値しない代物しか生み出せないことはわかりきっています。」(Schleiermacher 1838, p.218)。この講演では「忠実」か「自由」かという、翻訳者の選択次第と思われてきた二者択一が哲学的に再解釈されていた。シュライアマハーは結局、二つの方法の一方だけ、つまり起点言語を尊重する「忠実」の方法だけを方法として有効なもの、価値あるものとした。他方で目標言語の表現に重きをおく「自由」の方は、原理的に無効なものとして斥けられるのである。

フンボルトも、1816年公刊の翻訳『アイスキュロスのアガメムノン』に附した序文において、「忠実」の原理の有用性を説く。フンボルトについてはゲオルゲ・クライスとの比較という形でいま一度述べることになるが、「忠実」原理を推奨する理由として、フンボルトは未だ目覚めてはいないドイツ語の表現力が、この原理に依拠する翻訳によって、目覚め、開花し、豊かになるという点を挙げている。

ゲーテ晩年の詩集『西東詩集』には、「注解と論考」という詳細な自註が施されている。このゲーテの自註は「忠実」原理優位の状況に拍車をかけることになる。「注解と論考」のなかの短文「翻訳さまざま」において、「忠実」の方法は歴史的な展開によるものとして定式化される。ゲーテは翻訳芸術の歴史が辿る段階を三つに分けて考えている。すなわち簡素な散文訳によって異邦の文物の内容だけを伝えるのが初期段階であり、ついでそれら文物の内容を自国に固有の言語表現で再現するのが第二段階となる。これは異国の内容が自国の流麗な、心地よい言語表現で再現される段階だが、隣国フランスの翻訳文化はこの段階にとどまっている。しかしドイツは一步先を進んで、第三の段階に達している。異国の表現形式を自国語で模倣しようとする段階に、ドイツ文化は到達しているのである。自らの時代の翻訳文化は、この最後にして最高の段階に達している、とゲーテは言うのである(ゲーテ 1819, p.381 以下)。

このゲーテの宣言をもって、「忠実」原理に基づく翻訳方法は完全に定式化され、<ドイツ的伝統>と化したと見てよい。ゲーテの発言がもつ影響力は絶大で、それはゲーテの没後であっても変わることがなかった。たとえば美学上の概念である「象徴」と「アレゴリー」にしても、いったんゲーテが「アレゴリー」を否定的に評価してしまうと、この判断は絶対的なものとして受け入れられてしまう。20世紀になりベンヤミンが『ドイツ悲劇の根源』(1928)において「アレゴリー」の機能を積極的に評価するまで、「アレゴリー」による表現は低次のものと見做され続けたのである。

2.3 ニーチェとヴィラモーヴィッツ

ゲーテの宣言から約半世紀のちに、哲学者ニーチェは、いささか反語的にこの<ドイツ的伝統>を否定してみせる。『華やぐ知慧』(1882)の一節である。

翻訳—ある時代が所有する歴史的感覚の程度は、その時代がどのように翻訳をやり、過去の時代や書物を摂取同化しようとしているかという点を見ることによって、評価することができる。コルネイユの時代のフランス人、また革命時代のフランス人でさえも、今日のわれわれにはもはや

歴史的感覚が高められたために—そうする勇気がないような仕方で、古代ローマを我がものにした。(ニーチェ 1882, p.144)

ここで用いられた見慣れない語「歴史的感覚」は、ニーチェ独自の術語である。すなわち過去を尊重するあまり、かえって生きている人間の現在を疎外してしまう程の歴史尊重癖のことである。この歴史病ゆえにドイツ人が手を伸ばすこともできない翻訳方法が、ローマあるいはフランスに存在していた。ニーチェが推奨するのは翻訳の<ドイツ的伝統>とは反対の、フランス的方法、つまり原作の表現形式を尊重、模倣するのではなく、誇らかに原作を征服する翻訳、原作を換骨奪胎し我が物としてしまう翻訳方法なのである。ニーチェはこの方法を、民族の生命力発露のひとつと考えたようである。これは逆に言うと、ドイツの文化にはこの生命力がないために、かつて形成された伝統的な翻訳方法を墨守する他ないことになる。何とんでも、この方法はゲーテが認定したものなのである。翻訳者の課題は、起点言語の文体に従い、その表面的な模倣を目標言語において、つまりドイツ語において形成することだけなのである。

ニーチェが「革命時代のフランス人」の翻訳方法に見てとったものとは、翻訳ががらんもっているはずの「今、此処 *hic et nunc*」というモメントである。翻訳とは原作との歴史的な距離、言語的距離などを「高められ」た「歴史的感覚」に従って、あれこれと勘案した結果、おもむろになされるものではない。翻訳はそもそも彼我の文化落差に直面した人間によって「今、此処」でなされるという性格をもつからである。ニーチェはこの翻訳のもつ「今、此処」性を強調したのであり、さらにはその緊急性に耐えられる、民族としての活力の有無を問題にしたとも言えるのである。

このニーチェの処女作『悲劇の誕生』に対して辛辣な反駁文を公表し、後に古典文献学の大家となった人物にヴィラモーヴィッツ＝メーレンドルフ (Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff 1848-1931) がいる。その翻訳観は、翻訳の方法という点だけに絞れば、ニーチェと同じものになってしまう。第一次世界大戦前、「教養市民」^(注2)が社会の中枢を占めた第二帝政期に書かれ、その後ワイマール共和国時代に改稿されたエッセイ「翻訳とは何か」(1891/1925)の一部である。

ゲーテに関しては、非難の声を挙げぬわけにはいかない。ドイツの翻訳が辿った道、その間違った名声にはゲーテの責任が大いにあるからである。ゲーテの実践を言っているわけではない。しかし問題なのはゲーテの理論のほうなのだ。ゲーテが翻訳に要求するのはただ一点、どの外国語に関しても不十分だった自らの語学知識を補完してくれて、そのうえ原作が文体という点でも理解できるような性格が備わっていることなのである。翻訳がどっちつかずの代物に近ければ近いほど、また翻訳が異邦の文体に外側からしがみついているように見えれば見えるほど、ゲーテの要請には好都合だったのである。まさにゲーテには文体の不在こそが異邦の文体の頭れだった、…W.v.フンボルトおよび F.A.ヴォルフが、コレゾ翻訳者ノ義務ナリと説法したものをゲーテは信じ、結果として友人たちの翻訳をも信頼した。…これら先達が依拠していた韻律論が誤ったものであったことは、今日では詳論を要しない。(Wilamowitz-Moellendorff 1891, P.10)

「ゲーテの理論」とは先に言及した「翻訳さまざま」という短文である。古典語の韻律にはそれほど知識

のなかったゲーテは、周辺にいたフンボルトや古典文献学の創始者ヴォルフの言うことを、素直に信じてしまったのだ、とヴィラモーヴィッツは考えている。ヴォルフの時代より格段の進歩を遂げた古典文献学をヴィラモーヴィッツは代表していたわけで、その高みから見れば、そもそも翻訳の〈ドイツ的伝統〉の根底にあるのは古典語韻律に対する誤解にすぎない。古典語のリズムは長音と短音の組み合わせで形成されるが、ドイツ語のリズムは言語的な特質上、音の強弱の組み合わせで形成される。ドイツの翻訳者たちはギリシア語韻律の長音をドイツ語の強音に、短音を弱音に読み替えて、〈古典語の形式までドイツ語化できる〉、〈古典詩の韻律を模倣することがドイツ語には可能だ〉と誤解したにすぎない、とヴィラモーヴィッツは言うのである。

こうした反省をふまえてヴィラモーヴィッツが選び取った翻訳方法は、誤解の上に築かれた方法ではなく、ドイツの古典文学、つまりゲーテやシラーの文体を使ってギリシア古典を訳出する方法なのである。だが、これはゲーテの定義からすれば、翻訳文化の第二の時期の方法となってしまう。フランス的な、エスノセントリズムに彩られた翻訳方法になってしまうのである。ヴィラモーヴィッツはこの方法で古典古代の作品を訳出し、それらはクライスが台頭するまでは、「教養市民」向けの「高級文学」と賞賛されていたのである。

ヴィラモーヴィッツはニーチェとは異なり、「今、此処」というモメントを強調しはしない。古典文献学者の翻訳は、時間的、言語的落差を十分に勘案したのちになされる。「古典文献学者は、詩作品の完全な理解に達するべく、当然ながら全力で作業に取り掛かるが、必ずや己が理解を表現したいという思いに衝き動かされる。往古の詩人が語ったことをさらに語ろうと試みるわけだが、それには文献学者がみずからの言語で試みる他ない。つまり翻訳をするのである。」(ibid :p.2)つまり古代の文物をできる限り完全に理解することが、古典文献学者の第一の仕事であり、そのうちにその理解を自分の言語で再現したいという欲求が湧いてくる。翻訳はこの欲求を満たすために生じてくるものなのである。

このようにゲーテ時代に形成された翻訳の〈ドイツ的伝統〉は、半世紀を経過すると、もはや有効なものではなくなってしまう。ドイツ文化が陥っていた歴史病からの解放を目指して(ニーチェ)、ドイツ文化が築いてきた古典文化の護持を目指して(ヴィラモーヴィッツ)、かつての伝統は 19 世紀の末に否定されてしまうのである。

3 翻訳者の原像 - ヘルダーリンという奇跡

3.1 ゲオルゲ・クライスとヘルダーリン

翻訳の〈ドイツ的伝統〉が否定された 19 世紀の末から 20 世紀初頭に、詩人ゲオルゲを中心にクライスが形成された。詩人、翻訳家、哲学者、ドイツ文学者などがゲオルゲのもとに結集したが、クライスの一員と認められるには厳しい審査を通過しなければならなかった。知的エリート主義ともいべき敷居の高さが、クライスにある種の秘密結社的な雰囲気を与えていた。そのためか思想史家のピーター・ゲイは、クライスのスローガン「秘密のドイツ」を「新会員が一人ずつ選ばれ訓練されるクラブ」(ゲイ 1968, p.57)と考えている。クライスは、思想的には自らをニーチェの後裔と任じながらも、翻訳論においてはかつての「忠実」原理を拠り所とする。しかもかつての伝統を形成したシュライアマハーでも、ゲーテでも、フンボルトでもなく、詩人ヘルダーリンの翻訳作品から出発して、自分たちの翻訳観を構築していくのである。

ヘルダーリンは、抒情詩、書簡体の小説『ヒュペーリオン』、戯曲『エムペドクレス』を残した他に、ソポクレスの悲劇『オイディプス王』、『アンティゴネ』、ピンダロスの詩を翻訳している。彼は予定された職業である牧師となることをためらい、富裕な家庭に住み込んで子弟の教育にあたる家庭教師生活を選んだ。その傍ら創作に励んだわけだが、1804年ソポクレス翻訳が上梓されたところから狂気の兆候が見え始め、その後、没するまでの約40年を精神の薄明のうちに過ごした。翻訳に関して言うなら、この詩人が全くの無名だったことに加えて、ほとんど直訳調のソポクレス翻訳はドイツ語として形をなさず、悲劇の台詞がむしろ滑稽に響いてしまう部分さえあった。それらは当時すでに巨匠であったゲーテやシラーを前にして散々に嘲笑されたと伝えられている。(手塚 1985, p.407) そのほかにも神々の名を始めとする訳語の選択などが、ヘルダーリンの翻訳を異様なものにしており、結果としてこの翻訳はわずかな例外を除いてほぼ黙殺されたのである。

例外は女流作家のベッティーネ・フォン・アルニム(Bettine von Arnim 1795-1859)である。この女流作家は書簡体小説『ギュンデローデ』(1839)において、手紙の書き手「ベッティーネ」にヘルダーリンのソポクレス翻訳を高く評価させている。次はヘルダーリンの訳業に対する当時の酷評ぶり、理解されない真価の両面が語られる一節である。

サン・クレールがああのおイディプス、ヘルダーリンがギリシア語から翻訳したオイディプスを私にくれました。彼がいうのには、人はこれをほとんど理解しないか、理解するにしても、言葉の有り様を狂気の痕跡と説明するほどの悪意で理解している。ドイツ人には、その翻訳の言葉がどれほど荘重なものなのか、ほとんど分からないのだ。…私は彼の指示に従ってこのオイディプスを研究してみました。たしかに、このオイディプスは私を例の痕跡へと導きはしました、けれど言葉の有り様はそうではありませんでした。それは音調高く歩み、すべての苦悩、強力な表現をみな自らの内に取り込んでいるのです。こうした言葉こそがオイディプスとともに嘆かざるを得ない程に深く、深く私たちの魂を動かすのです。それはまさに私の魂を貫き通ったのです。私の魂はヘルダーリンの言葉が鳴るにつれて、共鳴するに違いありません。(Arnim 1839, p.160 以下)

文中の人物「サン・クレール」とは、実際のヘルダーリンの親友シンクレアを呼び換えたもので、小説中での書簡の書き手ベッティーネはこの人物と親交があったという設定になっている。思想的に考えた場合には、たしかにクライスのヘルダーリン受容は、ニーチェ哲学に影響された哲学者ディルタイのヘルダーリン論に触発されたと考えべきである(Martens 1982/83, p.57 以下)。しかしヘルダーリンへの熱狂という点ではまさに、このベッティーネの讃辞にみられるような小説的虚構から、クライスは出発したと考えてよい。

クライスの熱狂的な発言をいくつかみておきたい。まず優れた翻訳家でもあった詩人カール・ヴォルフスケール(Karl Wolfskehl 1868-1948)は、言葉の通じないはずの外国にいるのにすべてが理解できるという不思議な夢を記述しながら、異なるものの間に成り立つ「同一性」なる考えを示す。そしてヘルダーリンの翻訳こそがこの「同一性」の典型なのだ、と言う。それは字面はドイツ語でもヘルダーリンの翻訳からはギリシア語が聞こえ、意味も直截に理解できるということなのである。「たしかにドイツではかつて完璧な同一性という奇跡が生じたことがあった。ヘルダーリンのソポクレス、あのおイディプス王

はおそらくアンティゴネよりもはるかにこの奇跡を現じており、ギリシアのソポクレスと実際に寸分も違わない。」(Wolfskehl 1926, p.415)

医師であり哲学者でもあったクルト・ヒルデブランド(Kurt Hildebrandt 1881-1966)は、ヘルダーリン賛美に加えてドイツ語の表現力を称揚している。「ゲーテもレッシングも遙かな、手の届かない星晟のごとくに、アッティカ悲劇を崇めた。だが、心のあらゆる情熱を込めて、ヘルダーリンはギリシア文化を受け入れ、神的な威力に対する英雄たちの戦いを耐え抜き、ソポクレスの言葉に寄り添いながらも、それらに苦くもあり甘美でもある自分なりの調べを与えた。…しかし彼は、どんな言語にもましてギリシアの悲劇文体にぴったりと適合することができるのは他ならぬドイツ語なのだという、永遠の証明を果たしたのである」(Hildebrandt 1910, p.65 以下)。ヒルデブランドの見るところでは、ヘルダーリンはゲーテなどとは異なった形で、ギリシア文化を受け止めていたのであり、彼の翻訳はこの特異な受容を言語的に表現したものなのだった。ヘルダーリンの翻訳は、ヨーロッパの近代語のなかでも、他ならぬドイツ語が古代ギリシア語を模倣する能力に長けていることを証明するものだったのである。

こうした熱狂には距離を置きながらも、ルドルフ・パンヴィッツ(Rudolf Pannwitz 1881-1969)も、やはりヘルダーリンの訳業に理解を示し、その翻訳作品を成立時代を超えた「奇跡的」なものと呼ぶ。「というのもヘルダーリン自身がひとつの悲劇時代を具現していたために、先人の著作をひどく恣意的なものとはいえ幾層倍も高次な形式へと再生させることができた。これはふたつのソポクレス劇が、ひとえに個々の言葉や語群への崇高かつ意味深い誤解によって、新たな、往時よりも人を震撼させる意味を持ったのと同じく奇跡的なことなのだ。」(Pannwitz 1917, p.241 以下)

こうしたクライスのヘルダーリン評価は、もっぱらヘルダーリンのソポクレス翻訳に基づくもので、要点は二つに絞ることができる。一つには翻訳者ヘルダーリンによってギリシア古典が完璧な形でドイツ語化されたという評価であり、いま一つはヘルダーリンの翻訳によって、ドイツ語の秘められた能力が明らかにされたという評価である。

3.2 ヘリングラートのヘルダーリン研究

実は、ヘルダーリンにはもう一つギリシア古典翻訳がある。クライスが称賛するまでは、その存在さえ知られていなかった未刊のピンダロス翻訳である。この訳稿をクライスの一員であった少壮の文献学徒ノルベルト・フォン・ヘリングラート(Norbert von Hellingrath 1888-1916)が発掘・校閲し、クライスの機関誌『芸術草子』に掲載したのである。ピンダロス翻訳は、二つのソポクレス翻訳よりもさらに実験的な色彩、自らの詩作の糧とするための試行的色彩が強く、ドイツ語の通常のシンタクスなどは無視した逐語訳であり、その分だけドイツ語の造語力の豊かさを発揮させるものでもあった。(高木 1973)。

このヘルダーリンによるピンダロス翻訳の芸術的性格を、ヘリングラートは学位論文『ヘルダーリンによるピンダロス翻訳』(1911)において論じている。この論考は、しかし研究文献というよりは、クライスのヘルダーリン崇拝を学問的に根拠づける試みであった。というのもこの論文自体がクライスの美学綱領に基づいていることが、各章の構成の仕方からも解るからである。当時の学問的常識からすれば、第1章で書誌学的・文献学的な調査を報告し(実際には巻末の付論とされている)、その基礎の上に第2章を置きヘルダーリンの創作活動全体にしめるピンダロス翻訳の役割を検討する(実際に第2章)、さら第3章で自分なりのヘルダーリン解釈を展開する(実際には第1章)のが、学位請求論文の

基本的形態である。この構成の奇妙さに関する意見書、つまり学位審査委員の一人だったクルジウス教授の助言が、ミュンヘン大学の文書庫に残されている。その意見書では、ヘリングラートの論文は各章の配置を変えると「ひょっとすると(古代修辞学に奇妙に結びつきながら、明確に描き切れてはいない)根本思想も」生きてくるのではないか、とされている(Crusius 1910, p.209)。つまり学位論文の第1章は冒頭に置かれるべきではないと判断されているのである。クルジウスは、論文全体が学問とは別種の「根本思想」に導かれていることを見抜いていた。しかもその思想が、古代修辞学に奇妙な接続の仕方をしている学位論文の第1章にあることを見抜いていたのである。

ヘリングラートはクルジウスの助言に従わないまま論文を公刊するが、第1章は実際奇妙な始まり方をしている。何の説明もなくギリシア語の修辞学書『文章構成法』中にある文体の区別から始められる。これはヘレニズム時代の弁論家ハリカルナッソスのディオニュシオスの著作だが、この文献を実際にヘルダーリンが参照したかどうか分からない。またヘリングラートにも参照の事実を確認する気がない。ヘルダーリンが参照したことが立証されれば、影響関係といった点で、訳業の秘密を解く重要な手がかりとなるが、そのような歴史上の因果関係は無視される。古代抒情詩の文体の区別が、絶対的基準として導入されるのである。

ヘレニズム時代の修辞学が教えている、抒情詩の文体に関するあの二極的な分割に言及しておくほうがよいかもしい。かの修辞学は<硬い文結合>と<滑らかな文結合>とを区別し、前者の最も重要な詩人をピンダロスだとしているからである。私たちはこの表現をそれぞれ「^{ハルテ・フューグング}生硬な結合」および「^{グラツテ・フューグング}滑らかな結合」と言い換え、個々の要素が生硬な結びつきをするか、あるいはそれが滑らかであるかがこの表現の眼目なのだ、とすることができる。(Hellingrath 1911, p.1)

ヘリングラートは、ディオニュシオスの考えであるとして、文芸のあり方を二つに分けて考えている。語がどのように結びついているかが詩の文体を規定しており、それが二種類あると言うのだ。「生硬な結合」という原理に従って作られる詩においては、個々の語そのものが詩の表現単位となるように構成されている。したがってこの結合にあっては語そのものが前面に出て来る。他方「滑らかな結合」にあっては逆になる。語は、語の結びつきによって生み出されるイメージあるいは思想上の関連に従属してしまう。ヘルダーリンが自らの実作に生かすべく実験的に翻訳しようとしたピンダロスの原作では、一語一語が単独で表現単位として屹立し、聴衆の感覚に訴えるものだった。これに対し、「滑らかな結合」の詩では、語の連合によって作り出されるイメージが優先され、一つひとつの語が前面に出ることはない。つまり語そのものが感覚に訴えることはなく、語の連なりによって描かれるイメージや雰囲気の中に、語は埋没してしまうのである。

ヘリングラートにとって、この二つのヘレニズム由来の分類は、自らの文学・美学的な「根本思想」を表現するための絶対的な基準であって、この基準によってドイツの抒情詩の歴史を考えることになる。ヘリングラートはこの「生硬な結合」とドイツの文芸との関係を論じるより先に、滑らかな結合がドイツ文芸にあっては主流をなしてしまっている様を描く。

「滑らかな結合」においては、逆にイメージあるいは思想上の関連にいくつかの語が属している。それゆえ「滑らかな結合」は無媒介なものではなくなり、感覚に訴えるものが消えていくにつれ、これが詩を律する唯一のものとなってしまふ。さらに特徴的なのはこの表現単位が固定し、陳腐な定形表現と化してしまうことである。つまり、何か別のものに従属しその構成要素にすぎなくなった語は、いつもきまった硬直した旧来の結びつきの中にしか現われてこなくなる。ドイツの文学においては、ギリシア文芸にはみられなかったほどまでに—ことに後期ロマン派において、また民謡を経由して—この種の文体が形成され続ける。(ibid. p.2)

古代ギリシアにあつては、一方の極である<硬い文結合>は韻文ならピンダロス、散文ならトゥキュディデスによって代表されていた。他方の極は韻文なら sappho、散文ならイソクラテスによって代表されていた。だが近代ドイツの文芸においては一方の文学、「滑らかな結合」に依拠する抒情詩だけが蔓延している。それゆえにいま一方の極である「生硬な結合」に拠る文学は評価されることがない。かつてはその名を告げるだけで清新な生活感情を共有していることの証左となつたはずの、詩人クロップシュトックも忘れられたままとなつてゐる。クロップシュトックもクライスの^{マイスター}宗匠ゲオルゲも「生硬な結合」に拠る詩人なのである。すなわち旧態依然たる文学的感性には「クロップシュトックやゲオルゲがことごとしいもの、ドイツ語らしくないものと感じられてしまうのである」(ibid. p.8)。

前世紀のドイツ文学は、「生硬な結合」の存在を忘れさせる形で展開してきたのであり、読者の感性もその展開に沿って形成された、とヘルングラートは考へている。そうした感性から自由になるために、ヘルダーリンの訳業から翻訳の原理が取り出されねばならない。ヘルダーリンの極端な「忠実」、逐語訳を前にすると、翻訳の主たる任務は、内容の媒介ではなくなる。「文学翻訳がもつ格別の特性について問うて見るなら、すぐさま前述のことから明らかになるものがある。原作の芸術としての性格を再現することが肝要である限り、ことに晦渋な文体の作品にあつては、言語用法の高み、配語のあり方、シタクス上の緊張と絡み合いの仕方を的確に捉へることが極めて重要」(Hellingrath op.cit.p.7)となる。そのため「語義を厳密に捉へることなどには様々な自由配慮の余地が残されているため、さして重大なことではなくなる。」(ibid)とされる。つまり、原作の表現に密着する翻訳方法が選取りられ、原作の意味を再現することよりも形式の再現を重んじる翻訳方法が要請されたのである。

同時に翻訳者の陥りやすい過ちも指摘される。ヘルングラートの論法は巧みで、ヘルダーリンの悲劇翻訳に対して寄せられた批判から、その批判者達の翻訳観を明らかにし、その翻訳観の誤りを突くことになる。まずヘルダーリンへの批判とは次のようなものとしてまとめられる。

実際ヘルダーリン訳に下された判断は私たちのよく知るところとなつてゐる。つまりあれらの翻訳者の精神をそっくり語つてもいる判断である。いわく「ギリシアの原作に依存しすぎている」、「不安げに原作にかじりつゐる」、「あまりに原語に忠実」、「純粹に形式的なものを強調するあまり翻訳全体の精神や表現の美を考慮してゐない」。ソポクレスの悲劇翻訳に関するこれらの見解は、ピンダロス翻訳に向けられた唯一の評価とも重なる。(ibid. p.19)

文中の「あれらの翻訳者」とは、ヘリングラートがドイツにおけるピンダロス翻訳の歴史を概観しながら、その訳文体の不備、あるいは言語創造的な力の不足を指摘してきた凡庸なピンダロス翻訳者たちのことである。彼らの翻訳が不首尾に終わったのは、「ギリシアの原作に依存し」なかったからであり、あるいは「純粋に形式的なものを強調」しなかったからなのである。つまり原作の芸術的性格に配慮し、その再現を翻訳者にとっての最大の課題と考えなかったからなのだ。彼らは三つの過ちを犯してしまっている。すなわち「内容(精神)に関する解釈を訳文のなかに持ち込んでしまうという誤り、次いで原典の芸術としての性格(言語上の、形式上の部分)を見誤ること、そのために自分の持てる富からくポエジーを原典に与えるという過誤」(ibid)である。これらは、翻訳者が原作の芸術形式ではなく意味や内容を媒介しようとして犯してしまう過ちであり、いわば翻訳者の善意に発する過ちなのである。

このように翻訳の方法が、原作の形式を他の言語において再現する方向に向かうと、分かり難い翻訳は言うまでもなく、極端な逐語訳までもが是認されることになる。

理論的に言えば翻訳文は、原典を読んだ際に出てくるのと同じ意見の食い違いを、産み出すものでなければならない。もう一つ付け加えるなら、ヘルダーリンを理想的な翻訳者へと向かわせた唯一のもの、それは彼の文献学上の知識と参考資料が、ピンダロス理解、あるいは内容理解には十分でなかったという事実なのである。彼は単語を取り違え、間違えてあるいは不正確に訳文をつくり、それゆえ文章を、いや段落全体を誤解していることさえある。だからこそ、意味がはっきりしないために、必要以上に神経質とも思えるほど逐語訳の原則が遵守されもしたのだ。(ibid. p.23 以下)

ヘリングラートはヘルダーリンの語学知識の不備さえも、翻訳者としての欠点とは考えない。ドイツ語として読みやすいかどうかなどは度外視した逐語訳をも弁護するのだが、むしろ翻訳者の課題にも言及している。原作が難解である場合、その難解さをも再現すべきであり、分かり易いものにしてはならないという課題である。「原典に当てはまることがそのまま翻訳にも当てはまる、これは翻訳の拙劣さを示す徴とはならないのである」(ibid: p.25)。ピンダロスの詩がその表現の急峻さによって古代においても難解であったのなら、そのドイツ語訳も当然、分かり難いものでなければならないのである。

この翻訳の分かり難さ、あるいは翻訳作品が帯びてしまう異質さを弁護するという点でも、クライスは<ドイツ的伝統>に近づいている。伝統の否定者ヴィラモーヴィッツがゲーテの翻訳理論を批判する際に名を挙げた人物、フンボルトもまた翻訳者の犯しがちな過ちを指摘していた。翻訳が宿命的に持つてしまう不明瞭という印象をフンボルトも弁護していたのである。次に掲げるのはクライスにとっては100年前の翻訳論、『アイスキュロスのアガ멤noon』序論の一節である。

しかし原作がはっきりとは語らず暗示しているだけの場合、関連が掴みきれないメタファーが用いられている場合、間にたって説明する考えが抜けている場合、こんな時翻訳者はえてして不正をはたらきかねないものである。つまり原典の性格を欺くような明瞭さを訳文の中へ自分から勝手に持ち込んでしまう、という不正である。古代人の著作にときどき感じられる不明瞭さ、ことに『アガ멤noon』に備わっている不明瞭さは、原作の簡潔さと大胆さから生じてきている。仲介的な

結合文などは軽んじてしまう原作のこの特性は、さまざまな思想、形象の群れ、種々の感情、追憶と予感などと並んで作品に元々備わっているのである。(Humboldt 1816, p.141)

4 歴史考察と「秘密のドイツ」

4.1 翻訳と歴史 - ゲーテ時代

ここで、いま一度ギリシア古典の翻訳、ヘルダーリンと同じくピンダロス翻訳も試みたフンボルトの翻訳論を取り上げて、＜ドイツ的伝統＞の基礎を見ておきたい。それは起点言語中心の翻訳方法が、ゲーテ時代には固有の歴史意識と結びついていたことを示すものである。

まずフンボルトは原作の形式を尊重して形成された翻訳作品が、一定の「異質さ」を帯びてしまう点に積極的な価値を認めていた。そこで翻訳者が選び取るべき方法は「忠実」の原理、「理屈抜き忠実」となる。

言語と民族の精神のために、自分たちが持っていないか、別の形でしかもっていないものを我が物とすることが翻訳の使命であるのなら、第一に要請されるのは理屈抜きの忠実である。この忠実は原作の本当の性格に向かわねばならない。原作そのものをないがしろにして、作品に偶然備わったようなものに目を向ける必要はない。同様に優れた翻訳はみな原作に対する理屈抜きの、また何も要求することのない愛を、さらにそこから生まれてくる研究を、その出発点としなければならないし、そこへ回帰して行かねばならない。こうした見方と必然的に結びくのは、翻訳はある種の異質さを帯びてしまう、という考えである。(Humboldt op.cit. p.140)

つまり起点言語の表現を重視する理由は、そうした表現が目標言語に存在していない場合には、翻訳者が作り出す翻訳はその母語に対して異質なものとして作用するからであり、この異質さが、かえってその言語を豊饒化させる契機となるからである。翻訳を通じて新たな表現手段を言語は獲得し—栄養を摂取する有機生命体と同じく—自らを豊かにしていく。そう考える限りにおいて、この翻訳方法は自言語の豊饒化のためには有効な方法となる。これとは逆に、現在手持ちの表現方法で異質な言語表現を処理してしまうエスノセントリズムの翻訳方法では、異質さは排除され一向に自国の言語表現は豊かになることはない。

こうした言語の豊饒化、しかも翻訳を通じてなされる言語の豊饒化のプログラムは、未来を志向するものといえる。フンボルトは、さらに「それというのも翻訳とはむしろ、持続的な尺度にあてがうようにして、ある時点での言語の状態を検討し、規定し、働きかける作業なのであり、絶えず新たに繰り返されるべき仕事なのである。」(ibid. p.144 以下)と言う。ここでフンボルトは、時間の中にいる翻訳家、歴史の中の翻訳者について語っているのであり、同時にフンボルトの時代の歴史意識を明確に物語っている。まず「持続的な尺度」が何を意味しているのかは説明が必要であろうか。この言葉はピンダロスにせよ、アイスキュロスにせよ、古代ギリシアの作品群を意味している。近代の作品は古典古代の作品の完全性にはどうあっても追いつくことはできない。古代の作品とはむしろ北極星のごとくにその位置を変えることがない。他の星々はこの星との関係から、星座のなかでの位置を示すことができるに過ぎない。同様に近代語は古代ギリシア語の表現にどれだけ近づけるかによって、自らの状態を推し量

ることができる、そのための翻訳なのだ、とフンボルトは考えているのである。

またこの試みは近代語にあっては「絶えず新たに繰り返されるべき仕事」であるとは、近代語はかつて可能だった完全な状態にむかって発展していくことができる、という意味である。そうでなければ翻訳は、つねに無意味な繰り返しにすぎなくなってしまう。さらに一人の翻訳者が、原作の完璧な模像を作り出すことはできない。翻訳は原作に比べ、常に何らかの意味で不完全なものであり続けるほかない。だからといって、翻訳はやはり無意味な繰り返しではない。かつて古代ギリシアで可能だった完全性に、近代の翻訳者がそれぞれの翻訳を通じて無限に接近していることはたしかなのだ、とフンボルトは考えるのである。

人類には完成状態に向かって無限に近づいて行く能力が備わっているが、個としての人間はその限られた寿命ゆえにこの完成状態に到達するのを目撃することはできない。だが種としての人類は、いずれそこに到達できるはずであり、現在時とはその完成状態に近づいていく一段階なのだ、こうした考えがフンボルトの翻訳論の基礎となっていると言えよう。

哲学的な進歩史観といつてよいこの歴史意識は、フンボルトの時代、つまりゲーテ時代に固有のものといえる。これはフランス革命期の哲学者デイドロが唱えたといわれる人類の「完成能力 *Perfektibilität*」説であり、アメリカの思想史家アーサー・ラヴジョイなどによれば、ゲーテ時代の西欧の歴史意識を特色づけているものである(ラヴジョイ 1948, p.32)。

ドイツ語圏において、この概念は哲学者カント(Immanuel Kant 1724-1804)によって用いられている。たとえば論説「世界公民的見地における一般史の構想」(1784)では、自らの歴史哲学的な考察を押し進める装置として、この考えが用いられている。思想史研究が明らかにしたのは、こうした歴史意識がデイドロからカントへ、カントからフンボルトへという形で、いわば点と点を結ぶ形で伝達・受容されたということではない。むしろ「完成能力」説にもとづく歴史意識が、当時の西欧を覆っていたという事実である。そう考えるならフンボルトにせよ、あるいはシュライマハーにせよ、翻訳論の＜ドイツ的伝統＞は哲学的な進歩信仰に基づいて形成されていたと言えよう。

4.2 魔術的歴史考察-ヴォルフスケール

さて、クライスはニーチェ思想の継承者という意識を強く持っていたが、ニーチェはこうした進歩信仰を明確に否定している。「否！人類の目標が終末にあるなどということは断じてありえない。その最高の範例にあるのみだ」(ニーチェ 1874, p.194)だからであり、「人類は全体としては何の目的も持たず、したがって、人間は全経過を観察しつつそのなかに慰めと拠りどころを見いださず、絶望を見いだす」(ニーチェ 1878, p.60)のである。「完成能力」説にもとづくカントの主張などは、もの見事に否定されている。クライスの優れた文学史家フリードリヒ・グンドルフ(Friedrich Gundolf 1880-1931)は、詩人クロップシュトックについてドイツ的リズムの創出だけを評価し、「その他の点では彼は、一般的な人類愛の信奉者であり...進歩を信じた人だった」(Gundolf 1962, p.67)と、クロップシュトックを産んだ時代の特色である進歩信仰を評価の埒外においてしまう。クロップシュトックはドイツ語表現の刷新という功績以外には、時代の限界を超えることのなかった詩人であり、その限界のひとつが進歩信仰なのである。伝統を基礎づけているはずの歴史意識は、クライスにとっては過去の遺物にすぎない。念頭にある翻訳の手法はゲーテ時代と同じでありながら、その基礎をなしている歴史意識のほうは拒否され

ているのである。

それではクライスは、自分たちの翻訳論をどんな歴史意識の上に位置させようというのだろうか。彼らは過去を<元々あったとおりに>認識しようとする、あるいはそういう認識が可能だとする考えを<歴史主義>と決めつけ、これを批判し乗り越えることを目指す。ヴォルフスケールは、1927年の「歴史的忠実について」と題された短文において歴史の問題を論じているが、こう問いかける。「我々現代人は、過去と彼方にあるもの、つまり時空内での深い体験にどう関わるのか、我々はどうすればその体験をなおざりにせずにやっつけていけるのか、我々は懸け離れたものとどんな関係を持つのか、本当の歴史的忠実とは何なのか？」(Wolfskehl 1927, p.384)。現在から時間的・地理的にかげ離れてしまったものを経験する、つまり過去を経験するとは何を意味するのか、という問題提起だが、この問いは実は翻訳者の問いと同じものである。現在に生きる翻訳者は、過去の、しかも言語的にも「懸け離れたもの」とどう関係を結べばいいのか。作家とはちがって原作を前にしている翻訳者には一定の「忠実」は要求されるが、翻訳の「本当の忠実」とは何なのだろうか、等々である。

この問いに答えるために、ヴォルフスケールは世界像の形成プロセスを想起している。歴史上の事象はそれぞれ一回性と一般性を持ちうるが、どちらが優位に立つかによって、異なった世界像が形成される、と言われる。ヴォルフスケールはこの二つに第三項を加えることで、新たな歴史認識を基礎付けようと試みる。「この根本的な体験に加えて、これらが有効に働くためには、第三のものが出来なければならない。つまり流動するもの、あの仄暗くも漂う力である。それは...遠さによって追われ、駆り立てられ、かつ彼方へと架橋しながら、<今、此処>と<過去、彼方>とを結合する力である。」(ibid)。歴史の問題が翻訳の問題でもあるならば、翻訳もまた「遠さによって駆り立てられ、かつ彼方へと架橋」する行為であり、そこでは現在(翻訳者の言語)と過去(異邦の言語と作品)とが結合する力を必要とすることになる。

だが、この第三項はなんら実体を伴わない詩的、文学的にすぎる表現でしか語られていない。具体的には何かと問われてもヴォルフスケール自身も「漂う力」としか答えようのないものだが、<歴史主義>とは異なる歴史観を求めるクライスの姿勢がよく現れている。「この秘密に充ちた衝動によって我々は歴史を見、生氣あるものとし、現実となすのだ」(ibid)。つまり第三項は歴史考察の上での素材でも方法でもない。「秘密に充ちた衝動」にすぎない。当然こうした「衝動」に依拠する考察は客観的、あるいは科学的・学術的ではあり得ない。「今日力強く魔術的(強調は原著者)歴史考察への権利が我々の内に萌えてきているように思える。これが、本来の<歴史主義からの離反>の積極的根幹なのだ」(ibid)とされる。<歴史主義>から離れるには「魔術的」な歴史観が必要なのである。

この魔術性をヴォルフスケールは文学上の経験から導き出している。ダンテを読むというクライスにとって格別な経験からである。「ダンテが600年前に詩作したこと、つまり今日のイタリア語に比べて古めかしい言語形式なり思考形式で詩作したこと、彼は中世的な世界秩序と天上界の秩序を描き完結させたこと、また彼の外的な体験やら、迫害、不遇やら勝利やらを知っていること。これらによって、彼の創作が直接理解しやすくなるだと? 理解がたしかなものとなるだと? さらに理解が深いものとなるだと? そんなことは我々は金輪際、目にすることもなければ口に出すこともないだろう。」(ibid: p.385)。文芸学というより、当時の文学研究の主流であった実証的な文献学の作業がすべて否定されている。そんなものはダンテを直接理解するためには役に立たない。文学的感興の足しにはならな

いとされているのであり、そんな補助手段なしでも我々はダンテを理解し、翻訳し、文学上のインスピレーションを得てきたのではないか、とヴォルフスケールは言うのである。こうした直接＝無媒介の文学経験から、「魔術的」歴史経験が導き出されたのである。歴史考察を「その都度、まったく直截な無媒介のプロセス」(ibid)とするためには、言語と読者の想像力に依拠するだけの文学的経験ほど都合のよいものはないからである。

4.3 神話の形成-ベルトラム

エルンスト・ベルトラム(Ernst Bertram 1884-1957)もそのニーチェ論『ニーチェ神話の試み』(1921年)の冒頭でいわゆる<歴史主義>への不信を語る。「如何なる歴史的方法も我々に—19世紀の素朴な歴史的リアリズムが屢々信じているように—具体的現実をくそれが本来あったような形で>目の当たりにさせてくれることはない。」(Bertram 1921, p.1)

ではニーチェという過去の人物の評伝を書くに当たって、必要とされる歴史観はどんなものなのか。資料でも科学的方法でもない場に解決策を求めるのはヴォルフスケールと同じだが、ベルトラムが志向するものはいっそう体系的に見える。ベルトラムの目指す歴史記述は歴史上の人物などの「伝説」を建立することにある。なぜかといえば「我々は常に、過去に光りをあて、探求し尽くし、追体験しようと努めるが、過去のうちで残ったものは決して生ではなく、常に生の伝説(Legende)なのだ」(ibid)からである。歴史記述において、ことに歴史上の人物を描く際の課題とは、過去でも現在でもない無時間的な空間に超然と屹立する人物像を描くことになる。ニーチェ流に言えば「人類の目標は...人類の最高の範例に」あるからである。こうした「伝説」が、文献学などの学問の批判にさらされずに息づける空間とは、もはや神話の領域にしか存在しない。「それがどれ程鋭利に輪郭を描かれ、また歴史的知識によってはっきりと取り巻かれていたにせよ、伝説の形でのみ個性は作用し産み続ける力として、時代時代を越えて持続する...個性は像として、形姿として、つまり神話としてのみ生きているのであって、かつて在ったものの知識や認識として生きているのではない」(ibid)。

だが翻訳の問題とこの「神話」はどう関係するのだろうか。歴史記述と同じように、時間的な隔たりも言語的な隔たりも必要以上に意識する必要のない場が形成できるのなら、翻訳の障壁は予め取りのけられるのではないだろうか。原作をく元々あったとおりに>認識し、その認識を自分の国語で再現することなどは翻訳者の課題ではなくなる。歴史だけでなく翻訳までも、「神話」の場に持ち込むことができるなら、クライスにとっては、かつてヘルダーリンの訳業が見せた奇跡、古典ギリシア語とドイツ語との奇跡的な一致を根拠づけることが可能となるはずである。

4.4 秘密のドイツ

ヘリングラートの「ヘルダーリンとドイツ人」と題された講演(1915)では、ヘルダーリンによる翻訳の奇跡を可能にした文化的基盤が説明されている。そこでは本稿第3章で紹介した思想史家ゲイの理解とは違う「秘密のドイツ」の存在が告げられている。ドイツ民族がヨーロッパ内部で「ゲーテの民族」と呼ばれていることを講演の出発点としながらも、それとは違う、いま一つの民族性がドイツには存在していると言うのである。これは後にゲオルゲが、「一般に言われているそれとは別の民族精神」(ゲオルゲ 1919, p.353)と呼ぶことになるものである。

私は私たちをヘルダーリンの民族と呼びます。この民はすっかりドイツ的本質の中にあるからです。その内奥の燃えさかる核は、...秘密のドイツにおいてのみ現れてくるというドイツ的本質の内にあるのです。...あの隠されていた焰の、あの隠された王国の、さらにあの静かなそれと知られぬかたちで燃えさかる神的な核が形象となる際の同時的、最大の例がヘルダーリンなのです。
(Hellingrath 1915, p.120)

文中で用いられる言葉「ドイツ的本質」も、おそらくニーチェ由来の用語であるが、実体性に乏しい点では先達も後裔も変わるところがない。ヘルダーリンはすでに、ベルトラム流に言えば、「伝説」であって、「秘密のドイツ」という「神話」の中に息づいているのである。この「秘密のドイツ」とは、ヴォルフスケールのエッセイ「芸術草子と最新の文学」(1910年)において初めて語られたものとされている(Norton 2002, p.434; Wolfskehl 1910, p.233)。ゲオルゲにもそのままの表題を持つ詩「秘密のドイツ」があるが、この詩の成立年代は戦時中と想定されている。そのため「秘密のドイツ」はゲオルゲの詩に触発されて成立したスローガンとは考えにくい。むしろ1910年以降、クライスのメンバー内で浸透していた、自家製の「神話」と考えておいた方がよい。クライスはこうした「神話」を、自ら醸成しようとする雰囲気^{あな}に満たされていたのである。ゲオルゲの詩「秘密のドイツ」最終詩節は、ヘリングラートの講演にもまして、この「神話」を形象化している。

未だにいずれの触手にも触れられたことのない／深い眠りに守られて／聖なる大地の奥深い坑
に／久しくまだ静かに憩うているもののみが —／きょうはまだ理解しがたい奇跡／来るべき日の
運命となる。(ゲオルゲ 1928, p.299)

つまり「秘密のドイツ」は人目に付かないが、しかしドイツ精神の根底に存在している何かであり、それは時間も場所も超越している。ファウストが冥界のヘレナを呼び出すために向かう「母たちの国」のように、「秘密のドイツ」には時間もなければ空間も存在しない。「未だに...深い眠り」のうちにある何かなのである。そしてこの「神話」は人種としてのドイツ民族に固有なものではない。クライスにとって「秘密のドイツ」は「有機的な精神の王国」(Hildebrand, op.cit.: p.64)であり、現実の国家や人種とはいっさい無関係でなければならなかった。ヘリングラートは「我ら騒音に目覚めさせられる世界市民にして世界夢想者は...国民やら人種やらがどれほどの意味を持つのか、に気づくのである。そしてこの概念の本来の担い手を求めて気づくのは、それは血統でも、国家でもない。我々が行き着くのはいつでも言語なのだ。言語が民族の魂であり、民族の境界であり、民族の核心なのだ」(Hellingrath, ibid. p.124 以下)と語っている。「秘密のドイツ」が位置する場、またそれが現れてくる場とは、「言語」に他ならない。それはしかし、コミュニケーションの手段としての言語でも、表現の素材としての言語でもない。それ自体生命をもった有機体としての「言語」こそが、「秘密のドイツ」なのである。この「ドイツ」は現実の国家などとは何の関係もない限りにおいて、ドイツ語を母語とする翻訳者すべての唯一無二のよりどころとなる。この「ドイツ」こそがヘルダーリンの奇跡を可能にしたものだったのである。

翻訳者の用いる素材としての言語から「神話」へと格上げされたドイツ語は、他の近代ヨーロッパ語

には見られないほどの可塑性、柔軟さを誇ることになる。ヘリングラートは自らが編んだ『ヘルダーリン全集』第4巻の序言で、ドイツ語とギリシア語との関係について次のように述べている。

数世紀来ヨーロッパのどの民族も、ギリシアの人間性と言う形で自分たちに、いよいよはっきりと見えるようになったイメージに我が身を似せてきたにせよ、ヘルダーリンが果たしたことは、単にヘラスの夢をかつてよりも、よりしっかりとドイツ人の専有物としてくれただけではない。ヘルダーリンは、すべての言語のうちドイツ語だけを、重厚さ、冷徹さと聖なるパトス、イメージの直截、音調、動き、視覚の言語化において古代語に比肩できるものとしてくれたのだ。(Hellingrath 1914, p.XII)

ヘルダーリンの翻訳が示した「奇跡」は、ギリシア文化という卓越した内容がドイツ語という器で再現できることを示したばかりではない。彼は器そのものの卓越性も同時に証明していた。ヘルダーリンは、ドイツ語だけが古代語に比肩しうることを証明してくれたのである。つまりヨーロッパの近代語のなかで第一等の地位がドイツ語には保証されたことになる。パンヴィッツに至っては、世界の共通語としてのドイツ語を夢想する。オリエントの言語表現まで正確に再現できるようになったドイツ語は、翻訳によって「諸言語の母」(Pannwitz *ibid.*, p.245)になり得るとまで主張されるのである。

5 結び

本稿では「ゲオルゲ・クライス」と呼ばれたドイツの文学者集団の翻訳論を検討した。翻訳の原理を、「忠実」か「自由」かという二者択一と考えた場合、ゲーテ時代と呼ばれた18世紀末から19世紀の初頭には、「忠実」の原理がもっぱら是とされた。この原理によって未発達な言語であるドイツ語の表現力が拡大されると考えられたからである。こうした翻訳方法のドイツ的特色が形成された根底には、人類は無限にその完成状態にむかって進歩していくという歴史意識が存在していた。ニーチェの思想的後継者であったゲオルゲ・クライスは、当時無名だった詩人ヘルダーリンの翻訳作品という迂路を経て、翻訳思想の＜ドイツ的伝統＞に近づいている。しかしゲーテ時代の進歩信仰に代わる明確な歴史意識を構築することはできず、むしろ彼らは「秘密のドイツ」という神話を構築した。しかもこの自家製の神話は、翻訳者の具体的な手段であるドイツ語をさらに神話化していったのである。

筆者紹介：三ツ木道夫 (MITSUGI Michio) 同社大学言語文化教育研究センター・教授、ドイツ語担当。ドイツ文学・ドイツ思想および言語思想史専攻。主な論文は“Zur Benjamin-Rezeption in Japan” (K.Garber/L.Rehm (編) (1999) *Global Benjamin 3*. München: Wilhelm Fink Verlag) など。また編訳書として『思想としての翻訳 ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』(2008年) 白水社。

連絡先: mmitsugi@mail.doshisha.ac.jp

【註】

- 1 ドイツの翻訳思想においても、本稿で扱った時代ではこの対概念が用いられている。だが、次第にその意味は変化していく。ベンヤミンはこの対概念を「純粹言語」という観点から転調させてみせたとし、第二次大戦中にアメリカに亡命した作家、ヘルマン・ブロッホに至っては、この対概念とはまったく別の観点から、翻訳について哲学的な考察を行っている。詳しくは、拙訳『思想としての翻訳』2008年 白水社を参照されたい。
- 2 教養市民とはドイツの「第三身分」とも言うべき階級。僧侶でも貴族でもなく、学歴という手段で社会の中核を占めた階級を言う。大学卒業により実践的な教養を身に付け、それにふさわしい職業(行政官・司法官等の官僚、大学教授、医師、弁護士など)に就くことができた人々を指す。

【参考文献】

- Apel, F./Kopetzki, A. (2003). *Literarische Übersetzung*. Stuttgart/ Weimar: Verlag J.B. Metzler.
- Arnim, B.v. (1839). *Die Gunderode* (1983) Leipzig: Insel. (Original work published 1839)
- Bertram, E. (1921). *Nietzsche. Versuch einer Mythologie*. Berlin: Georg Bondi.
- Crusius, O. (1910). Gutachten zu Hellingraths Dissertation :Kaulen, H. *Der unbestechliche Philologe. Zum Gedächtnis Norbert von Hellingraths, Hölderlin-Jahrbuch 27. Bd.* (1990-1991). Stuttgart. 182-209.
- Gundolf, F. (1962). *Klopstock*: Gundolf, F. *Dem Lebendigen Geist*, Heidelberg-Darmstadt: Verlag Lambert Schneider. 60-68.
- Hellingrath, N.v. (1911). *Pindar-Übertragungen von Hölderlin*. Jena: Eugen Diederichs.
- Hellingrath, N.v. (1914). Vorrede: *Hölderlin Sämtliche Werke*. (1916) München und Leipzig: Georg Müller. XI-XXII.
- Hellingrath, N.v. (1915). *Hölderlin und die Deutschen*.: Hellingrath, N.v. (1944) *Hölderlin-Vermächtnis*, 2. vermehrte Auflage, München: Bruckmann. 119-150.
- Hildebrandt, K. (1910). *Hellas und Wilamowitz* (Zum Ethos der Tragödie): *Jahrbuch für geistige Bewegung*. (1910) Berlin: Blätter für die Kunst. 64-117.
- Humboldt, W.v. (1816) *Einleitung zum Agamemnon*: Humboldt, W.v. (1981) *Werke in 5 Bdn. V*, Darmstadt: J.G. Cotta'sche Buchhandlung. 137-145.
- Martens, G. (1982/83). *Hölderlin-Rezeption in der Nachfolge Nietzsches—Stationen der Aneignung eines Dichters: Hölderlin-Jahrbuch*, 23. Bd. Tübingen. 54-77.
- Norton, R. E. (2002). *Secret Germany*. Ithaca & London: Cornell University Press.
- Pannwitz, R. (1917). *Die Krisis der europaischen Kultur*. Nuernberg: Verlag Hans Carl.
- Schleiermacher, F. (1838). *Ueber die verschiedenen Methoden des Uebersetzens* : *Friedrich Schleiermacher's Saemtliche Werke, dritte Abtheilung. Zur Philosophie, zweiter Band.*, Berlin: G.Reimer. 246-286.
- Wilamowitz-Moellendorff, U. v. (1891). *Was ist Übersetzen?*: Wilamowitz-Moellendorff *Reden und Vorträge*, Bd.1. Berlin: Weidmannsche Verlagsbuchhandlung. 1-36.
- Wolfskehl, K. (1910). *Die Blätter für die Kunst und die neueste Literatur: Gesammelte Werke 2. Bd.* 1960. Hamburg: Classen. 219-236.

- Wolfskehl, K. (1926). *Von Sinn und Rang des Übersetzens: Gesammelte Werke 2. Bd.*1960. Hamburg: Classen. 414-419.
- Wolfskehl, K. (1927). *Über historische Treue.: Gesammelte Werke 2. Bd.*1960. Hamburg: Classen. 383-389.
- ベルマン, A. (1984/1994) 「翻訳の思弁的理論」(大西雅一郎・久保哲士訳)『批評空間』No.12: 108-127.
- ベルマン, A. (2008) 『他者という試練』(藤田省一訳) みすず書房
- ディオニュシオス (2004) 「文章構成法」(木曾明子訳).ディオニュシオス/デメトリオス『修辞学論集』(木曾他訳) 京都大学学術出版会
- ゲイ, P. (1968/1987) 『ワイマール文化』(亀山庸一訳) みすず書房
- ゲオルゲ, S. (1919/1994) 「ヘルダーリン」『ゲオルゲ全詩集』(富岡近雄訳) 郁文堂 351-353.
- ゲオルゲ, S. (1928/1994) 「秘められたドイツ」『ゲオルゲ全詩集』(富岡近雄訳) 郁文堂 207-299.
- ゲーテ, J.W. (1819/1981) 「西東詩集 注解と論考 -西東詩集のよりよき理解のために」(生野幸吉訳)『ゲーテ全集 15』(小栗浩他編訳) 潮出版社 275-388.
- ラヴジョイ, A. (1948/2003) 『観念の歴史』(鈴木信雄他訳) 名古屋大学出版会
- ルター, M. (1530/1973) 「翻訳についての手紙 (付 聖人へのとりなしについて)」(笠利 尚訳) 『ルター著作集』第1集9巻 聖文舎 331-363.
- ニーチェ, Fr. (1872/1979) 『悲劇の誕生』(浅井真男訳) 『ニーチェ全集 1』白水社
- ニーチェ, Fr. (1874/1980) 「生に対する歴史の功罪」(大河内了義訳) 『ニーチェ全集 2』白水社
- ニーチェ, Fr. (1882/1980) 『華やぐ知慧』(氷上英廣訳) 『ニーチェ全集 10』白水社
- 高木昌史 (1973) 「ヘルダーリンの文体美学 -後期讃歌の研究(その 1)-」『人文学報』(東京都立大学 人文学部) No.95: 27-66.
- 手塚富雄 (1985) 『ヘルダーリン(下)』中央公論社
- 辻由美 (1993) 『翻訳史のプロムナード』みすず書房
- 三ツ木道夫編訳 (2008) 『思想としての翻訳 ゲーテからベンヤミン、ブロッホまで』白水社